

自閉症スペクトラム障害児の心の理論や共同注意と社会的行動

岡本 駿一

【目的】

自閉症スペクトラム障害の子どもは心の理論の誤信念課題に失敗することが多い。「自閉症スペクトラム障害の心の理論仮説」では他者の信念に関する知識の有無と社会的領域での行動上の問題を結びつけている。しかしそのことが日常の社会的行動にどのような影響を与えているかは明確でない(Peterson, Garnett, Kelly, & Attwood, 2009)。

就学前後の時期でも ASD 児において、共同注意行動が向社会的行動などの社会性と関連する(Travis, Sigman, & Ruskin, 2001)。共同注意の並列分散処理モデルでは、自閉症児の発達の機軸として非連続的な知識の発達よりも共同注意システムの連続的な発達を重視する(Mundy, Sullivan, & Mastergeorge, 2009)。心の理論の獲得が社会的行動に与える影響について、共同注意の発達を考慮して検討する必要がある。心の理論課題や象徴遊び課題の成績と社会的行動に影響するとされる共同注意の開始行動を査定し、日常の社会的行動との関連を調べた。

【方法】

本研究の観察は、某病院で行われている自閉症スペクトラム障害児(ASD 児)を対象とした集団療育の自由遊び場面で行った。研究協力者は 5-6 歳齢の ASD 児 16名(男児 14名, 女児 2名)であった。対象児全員について CARS による自閉症の重症度の評価、新版 K 式発達検査 2001, また誤信念課題と表情認知課題(怒り、喜び、悲しみ、驚きの表情絵カードのラベリング課題)が予め実施された。検査場面中の共同注意の開始行動を査定した。課題が完了した直後やゲームでサイコロを転がして出た目を見た直後など、共同注意の開始行動が起きると考えられる 11 の場面でのアイコンタクトを査定した。16名中9名のみ象徴遊び課題を実施した。日常的な集団場面での行動観察は個体追跡法で、自由遊び場面とおやつ場面での他者との関わりを対象とした。話題、ルール、目標の共有、情動共有、問題行動や常同行動が 20 秒毎に生じたかどうかを各児について記録した。情動共有は他者の顔を見る行動の中で、笑顔になり相手も肯定的な反応をする、またはゲームで成功した後に自発的に相手の顔を見る行動の起きた割合である。また相手の顔の方に自分の顔を向けたかどうかや、関わりかけの対象が大人か他児かも記録した。

【結果】

発達年齢、誤信念課題の成績、表情認知課題の成績、検査場面での共同注意行動の生起回数、生活年齢、また CARS 得点が、集団自由遊び場面での社会的行動に与える影響を調べるためステップワイズ法による重回帰分析を行った。

関わりかけの頻度を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析の結果、説明変数として生活年齢と CARS 得点と表情認知課題の成績と発達年齢がモデルに残った。関わりかけの頻度の分散は 48%が説明され($R^2=.48$, $p<.05$)、発達年齢が正の影響を与えていた。

「話題、ルール、目標の共有」の頻度を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析の結果、説明変数として生活年齢と CARS 得点と誤信念課題の成績と表情認知課題の成績と共同注意の開始がモデルに残った。「話題、ルール、目標の共有」の頻度の分散は 65%が説明された($R^2=.65$, $p<.01$)。他者との話題、ルール、目標の共有には、誤信念課題の成績が正の影響($\beta=.72$, $p<.01$)、生活年齢($\beta=-.52$, $p<.05$)と表情認知課題の成績($\beta=-.50$, $p<.05$)が負の影響を与えていた。

情動共有を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析の結果、説明変数として誤信念課題の成績と表情認知課題の成績と共同注意の開始がモデルに残った。情動共有の分散は 52%が説明された ($R^2=.52$, $p<.01$)。共同注意の開始 ($\beta=.65$, $p<.01$)と表情認知課題の成績 ($\beta=.43$, $p<.05$)が正の影響を与えていた。

問題行動や常同行動の頻度を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析の結果、説明変数として発達年齢と CARS 得点がモデルに残った。問題行動や常同行動の分散は 36%が説明された ($R^2=.36$, $p<.05$)。CARS 得点の正の影響 ($\beta=.47$, $p<.05$)が見られた。

対象児 16 名の内 9 名には象徴遊び検査を実施した。象徴遊びの得点と CARS 得点、発達年齢、誤信念課題の成績、表情認知課題の成績、検査場面での共同注意行動の回数、また生活年齢が、社会的行動に与える影響を調べるためステップワイズ法による重回帰分析を行った。

関わりかけの頻度を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析の結果、説明変数として象徴遊びの得点と誤信念課題の成績と表情認知課題の成績がモデルに残った。関わりかけの頻度の分散は 76%が説明された ($R^2=.76$, $p<.05$)、象徴遊びの得点が正の影響 ($\beta=.55$, $p<.05$)、表情認知課題の成績が負の影響 ($\beta=-.58$, $p<.05$)を与えていた。

他児への関わりかけの頻度を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析の結果、説明変数として象徴遊びの得点がモデルに残った(表 2-6-2)。他児への関わりかけの頻度の分散は 46%が説明された ($R^2=.46$, $p<.05$)。象徴遊びの得点が正の影響を与えていた ($\beta=.73$, $p<.05$)。

【考 察】

ASD 児において心の理論の獲得は、共同注意行動や自閉症の重症度、認知能力とは別に、会話や遊びにおける他者との共有に関わっている。一方で共同注意や表情認知の能力は他者との情動共有に関わっている。心の理論には誤信念理解や視点取得などの言語化可能な側面と共感や共同注意の開始などの直感的な側面があると予測されており(Travis, Sigman, & Ruskin, 2001)、今回の研究は、誤信念理解のような心の理論の言語化可能な側面は遊びや会話能力ととくに関連していることを示唆している。

象徴遊びの能力は、関わりかけの頻度全体や他児への関わりかけの頻度に正の影響を与えていた、ASD 児の象徴遊び能力には言語性・非言語性の認知能力が影響している (Stanley & Konstantareas, 2007)ため、象徴機能の発達が言葉やイメージによるコミュニケーションを可能にし、関わりかけの積極性に影響したのかもしれない。

今回の結果はASDのアセスメントに役立てることができる。小児自閉症評定尺度(CARS)は、日常場面での問題行動や常同行動を予測するのに優れていると言える。その理由としては、CARS の 15 項目のうち 8 項目が常同性や感覚の非定型性に関わるものや情動調節に関わるものであることが関係していると考えられる。しかし、会話や遊び、他児との関わりや楽しさの共有など社会的相互交渉に関わる行動は、誤信念課題や表情認知課題、共同注意の開始行動の方がより予測力があつた。また象徴遊びに見られる象徴機能の発達が関わりかけの積極性の予測に役立つことが分かった。(比較発達心理学)